

題字 大島文雄先生

# 人文

じんぶん

「人文」と共に！ 人文学部同窓会長 米原 寛 (14回史学)

「人生 100年」を生きる時代 中野英子 (8回史学)

二村文人先生追悼 人文学部教授 呉羽 長

研究室から／東洋史

後輩にエールを送る 島 隆司 (22回史学)

研究室から／ドイツ言語文化

社会人学生として過ごした貴重な二年間

三好清超 (大学院26回歴史文化)

中国を味わう 長瀬知香 (61回日本語学)

旧制富山高等学校同窓会所蔵資料の受領について

卒業祝賀会、第2回人文の集い、新刊案内等

『源氏物語』の終焉と紫式部

人文学部教授 呉羽 長

今年の総会でご講演いただきます。

詳細は8ページをご覧ください。

宇治橋詰の紫式部像



宇治古蹟・早蕨・浮舟彷徨の辺り

宇治の河波・山荘辺を望む

富山大学人文学部同窓会

〒930-855 富山市五福3190

電話：(076) 445-6143

FAX：(076) 445-6142

E-mail：  
alumni@hmt.u-toyama.ac.jp



TOYAMA

# 「人文」と共に!

人文学部同窓会長 (14 回史学)

米原 寛



ル化社会など社会自体がいわば混乱しているなかにあつて、多視点的情報の獲得も必要かと思ひます。そのような意味で、同窓生間の人的交流の場を設定することは意義のあることと思ひます。

昨年十一月人文学部同窓会長に就任いたしました。人文学部の前身である文理学部文学科(十四回史学専)の卒業生です。同窓会長を引き受けて約半年。会長として一体どのようなことをお世話しなければならぬのか。いろいろと考えてみました。が、なかなかこれといって良い考えは浮かんできません。ですが、同窓会本来の役割は、一つには、在学生への支援があり、今一つには、世代を超えた幅広い同窓生間の人的交流の場を設定することにあるかと考えます。殊に価値観の多様化、グローバ

現在、富山大学では、八学部による同窓会連合会が組織され、学部にとどまらず他学部の卒業生との交流も進められており、「富山大学ホームカミングデー」と銘打って、秋の一日を各学部の特徴を生かした紹介事業を行っています。今年は人文学部が担当することになっています。文字どおり「ホーム―母校―においでください」という趣旨の行事です。また、人文学部でも恩師や同窓生の状況・消息を掲載する本誌『人文』の発刊をはじめ、恩師の講演や懇親会を行う「人文の集い」を開催しており、

恩師や同窓生との交流の場になることを期待しているところ。同窓生の皆さん一人ひとりのさまざまな職場経験や人生経験は大変貴重ですが、その経験は、同窓生との交流によってさらに大きな力となって個々人に還元されるものと思ひます。

ところで、皆さんもお気づきのように、現代社会は、一見豊かで便利にみえますが、反面、豊かさの代償として人の心を貧しくしており、見かけとは裏腹に孤独を抱えています。今やさまざまな点で「人間性の喪失」、「無縁社会」という言葉で表わされる人間関係の希薄さも危惧されています。こうした時期にこそ、同窓会の存在が大きな意味を持つのであり、これから新たに同窓会員となる在学生にとつても心強い羅針盤となるものではないでしょうか。

さて、このように、同窓会を大いに活用して欲しいと言ひましたが、「心が通ひ合う社会」の実現にむけて、一層、自らを高め、個性を磨いていくことも肝要と思ひます。

仕事上の知識や技術を錬磨することは勿論ですが、「人として」生きることが大事です。「人

として」生きることが、いつの世にあつても変わらない「不易」の在り方です。「流行」に惑わされず、自己を律し、よりよき人間関係を構築していききたいものです。

能の大成者世阿弥は『風姿花伝』のなかで、「目前心後」という言葉を書いています。この「目前心後」とは、目の前の見える事柄にのみ注意するのではなく、見えない背中にも注意しなさいということ。見えないう背中をどうみるか、背中とは影であり欠点や弱点の比喩です。それは他人に見てもらひ、評価や意見を聞くということ。敢えて評価し意見を言ってくれる友人・上司、先輩・後輩がいるということがとても大事であるということ。このような人間関係をつくって欲しいと思ひます。「人は人によって生かされるものです」

ここで、今一度、世阿弥の言葉を用ひしますと、「初心忘れるべからず」です。初心とは「初めて」の志」ということだけではなく、未熟であった時の最初の試練や、失敗こそが「初心」という言葉の本当の意味です。皆さんの前途にはいつも試練が待

っています。その時に助けになるのが、かつての若いときの試練や失敗の経験です。試練を乗り越えたと自信が生まれます。なんでも出来そうな気がします。実は、この時こそ、本当の人生の試練の時だということです。その時こそ、周囲の人を見て学び、先輩や同輩にも尋ねて、自らの行動を見定めていくことが大切だと言うことです。結局「初心を忘れるべからず」とは、己を知りつつ、新しい事態に挑戦していく心の構えであり、姿に他ならないと思ひます。

さて、仲間と共に学んだ人文学部の同窓生の皆さん、同窓会は皆さんのもう一つの学舎です。皆さんと先輩後輩とを結ぶ架け橋でもあります。人文学部同窓会の一員として同窓会を存分に活用してください。また、同窓会の活動にも力をお貸しく下さるようお願いいたします。

(富山市在住)



旧制富山高校敷地内の石碑「青冥万里」

# 「人生一〇〇年」を生きる時代

NPO法人死ねない時代研究会代表

中野 英子 (8回史学)

## 「人生五〇年」から「人生二〇〇年」へ

いま私たちは「人生五〇年の時代」から「人生八〇年の時代」を経て、「人生一〇〇年の時代」という未踏の世界へ踏み出そうとしています。

平均寿命が男女ともに五〇年を超えたのは太平洋戦争が終わったころでしたが、その後順調に伸び続け、将来にわたってもかなりの勢いで伸び続けることが確実視されています。とくに女性の伸びが大きく、二〇五〇年以降もなお伸びると考えられています。女性に比べて伸びが弱く、八〇年を超えそうになかった男性の平均寿命もついに八〇年を超えるに至りました。

**逆さまになる人口ピラミッド**  
この寿命の伸びを簡潔に表現するのが人口ピラミッドの変化です。

図1は一九五〇年と二〇六〇

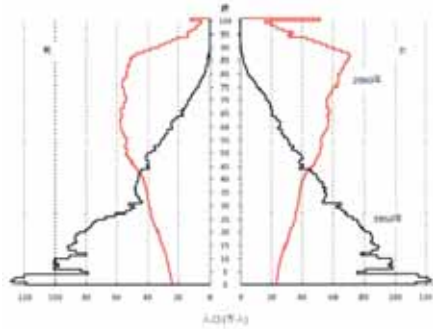


図1 人口ピラミッドの比較 1950年と2060年

年(国立社会保障・人口問題研究所推計)の人口ピラミッドを比較したものです。一九五〇年の人口ピラミッドは底辺が大きく、頂上に近づくほど小さくなる「三角形」を示しています。ところが二〇六〇年では底辺が著しく小さくなるとともに、人口ピラミッドの胴部分(働き盛りの世代)よりもはるかに大きい頂上部分が現れます。

このことは「人生一〇〇年の

時代」が信じられないほど大きな高齢者集団をもつ社会になるということ物を語っています。そこで七五歳を例に、生まれてから七五歳まで生きる人の割合(七五歳までの生存率)の変化を見てみましょう(図2)。

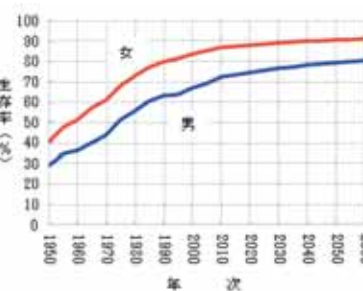


図2 男女別75歳までの生存率:1950年~2060年

図2から、七五歳までの生存率が男女ともに右肩上がりのカーブで上昇し、これからも上昇し続けることがわかります。ちなみに二〇六〇年では女性の九〇%が七五歳まで生きることになります。

## 変わる世代間関係

人口ピラミッドの変化を世代間関係の変化という視点から見てみましょう(図3)。

まず、子ども世代(〇~一九歳)の減少が急であることが目を引きます。それが一九九〇年代以降の働く世代の減少となっ

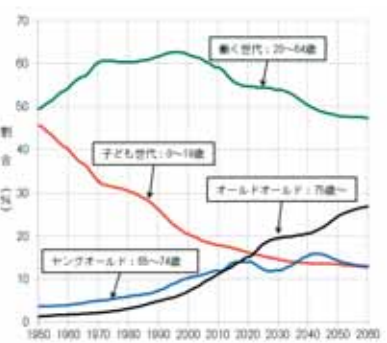


図3 年齢4区分別人口割合

て表れます。ところが、六五歳以上の高齢者世代は一九七〇年の七%(高齢化元年ともいわれています)から二〇六〇年には四〇%へと増加します。問題は高齢者世代の年齢構成です。

そこで高齢者世代を、ヤングオールド(六五~七四歳)とオールドオールド(七五歳以上)に分けて考えてみましょう。二〇二〇年ごろまではヤングオールドがやや多いものの、ヤングオールドとオールドオールドはほぼ同じような増加傾向を示しています。高齢化が進んでいるものの、その実態は「若い」高齢化社会だったということができるでしょう。ところが二〇一〇年代以降は、ヤングオールドがほぼ安定するのに対して、オールドオールドが急速に

増加に転じます。ちなみに、二〇六〇年には高齢者世代の二〇三(六七%)をオールドオールドが占めるまでになります。

## 長い高齢期をどう支えるか

長期にわたる出生率低下と寿命の伸びが続くなかで、人口が減少し高齢化率が四〇%に迫ることは避けることはできません。今世紀半ばにはヤングオールドと二〇歳以下の子ども世代が同数になり、六五歳以上の三人に二人がオールドオールドであるという、人類初の社会が出現します。これは高齢期が長期化する必然の結果です。この高齢期の長期化は世代間関係を変化させ、家族の小規模化を進めます。長い高齢期は家族の支え以上に社会の支えを必要とします。高齢化が急ピッチに進む今こそ、「人生一〇〇年」を生きるための「負担と享受」がどうあるべきか、それを世代間でどう分かち合うかを真剣に考えなければ社会保障制度の成熟は望めません。その意味でも、高齢期の長期化は、決して高齢者だけの問題ではなく、むしろ若者にとつての大きな社会問題だといえます。

(東京都在住)

## 二村文人先生追悼

東アジア言語文化講座日本語文学教授

呉羽 長すむ

村田千晴さん提供

そうしたご研究がそのまま趣味と繋がり、先生は落語・講談を楽しんでその情緒を愛し、また地域の連句の会の運座を取り持ち、歌舞伎・文楽を見に東京などへ行かれておりました。

人文学部卒業生、並びに人文科学研究科修士の皆様に、謹んで、本学部の二村文人教授が六月十一日、脳梗塞によりお亡くなりになりましたことをお知らせ申し上げます。

二村先生は、平成五年四月、教養部廃止に伴い本学部日本東洋言語文化講座（現在の東アジア言語文化講座）に助教授として移籍され、以来同九年九月の教授昇任を挟んで、日本文学分野で教育と研究に力を尽くされました。

ご研究は、落語・講談を中心とした舌耕文学、及び式目を中心とした俳諧の文学的価値の研究をめざすものでありましたが、

していくことで、生きる力としていくよりありません。

亡くなられて四十九日を過ぎた七月三十日、日本語文化の研究室では教員・学生による二村先生追悼の集いを本学部大会議室で催しました。学部長、並びに東アジア言語文化コース内の教員の方々にも列席いただき、二村先生生前の業績を偲び、思い出を語り合い、先生とのお別れをいたしました。その折に、先生から生前句作の指導をいただいた学生たちが先生を悼む句を作り供花とともに捧げました。その幾つかを、作者名を付してここに掲げさせていただきます。学生の清らかな涙によって作られた句が、残された者それぞれの心の空虚を埋め、深い感謝の気持をもって歩み出す一助になればと願うものです。

・扇子手に本読む仕草真似てみる  
四年 浦島 由貴

・戻るべき原郷のあり夏教場  
四年 松本 彩花

・思ひ出にしづくおちけり額の花  
三年 南部 美帆

・長雨のやむことのなき涙かな  
二年 谷口 絵梨

・夏の陽に清しき笑顔いつまでも  
二年 北村 智子

## 研究室から

東洋史

歴史文化コース教授

澤田 稔

歴史文化講座では二〇〇六年度の学科再編にともない、日本史・東洋史・西洋史・考古学の四つの教育研究分野からなる歴史文化コースを発足させました。それはこれまで個々のコースを構成してきた各専門分野の強みを生かしながら、古文書や編纂史料にとどまらず、遺物や遺跡などの考古資料に立脚した研究成果を取り入れた幅広い歴史教育の実現をめざすものにほかなりません。



学生の読書離れが声高に叫ばれる昨今では、邦語で書かれた文献の読解・分析にも適切な指導が必要なため、三名の教員が連携して論文の読解指導にも努めており、緩やかながらその成果も次第に表れつつあります。

このうち東洋史分野は人文学部が文理学部と呼ばれていた頃からの古い歴史を持ちますが、現在は澤田稔が中央アジア史とイスラム史を講じさせていたでいておりますほか、近世中国史を専門とする徳永洋介教授、中国近現代史のなかでも張作霖時代の東北地方を研究する瀧谷由里准教授の総勢三名で学生の指導にあたっております。

また、ここ三年來は徳永教授を中心に近世中国の政治と法制に焦点を合わせた学術シンポジウムを毎年開催しており、研究活動の面でも積極的な取り組みが続けております。お蔭様で、学界の第一線で活躍する研究者を交えた議論はますます熱気を帯びておりますだけでなく、回を重ねるごとに学生たちの目が輝きを増してきていることに確かな手応えを感じております。

## 後輩にエールを送る

島 隆 司 (22回史学)



大学を卒業して富山市に本社を置く新聞社に入ったのは昭和四十九年。あれから四十年が経過するが、いまだ勤めている。富山県内で生まれ育ち、地元大学に進学。そして地元企業に入社して、県外での勤務経験は一度もない。典型的な地元人間として過ごしてきた。

そんな自分とは対照的な後輩学生たちを今年夏のインターンシップで受け入れた。総勢二十一人が三グループに分かれ、それぞれ五日間にわたって職場体験するという内容。富山大学生は十一人で人文学部生と経済学部生が各五人、工学部生が一人

だった。男子二人、女子三人の人文学部生は全員が県外出身者。

新聞の読み方講座、取材から記事執筆・添削指導、コンピュータの画面上で紙面をレイアウトする作業のほか、営業局や事業局の業務を体験してもらった。初めは緊張していた学生たちも次第に職場の雰囲気になじみ、社内のあるちこちで元気なあいさつが聞かれるようになった。彼らの真剣な表情を見ていて、ふと思ったことがある。実は、新聞業界はいま、若者だけでなく中高年層の活字離れ・新聞離れという風潮にあえいでいる。全国の新聞の発行部数は約四千万部で十年前に比べ約六百万部も減っている。インターネットの普及や少子高齢化の進展が影響していると考えられるが、全国紙も地方紙も軒並み減らしているのが現状だ。

新聞社の経営は主に販売収入

と広告収入に支えられており、発行部数減はきわめて深刻なダメージを与えるのである。

もちろん、各社ともこうした風潮に手をこまねいていた訳ではない。幅広い層に読まれる新聞づくりに知恵を絞り、様々な工夫を試みてきた。学校現場で新聞を活用するNIE(教育に新聞を)活動にあわせて、子供向けの紙面を設けたり、子供新聞を発行するところもある。将来の読者を開拓しようという取り組みでもある。一方、ネット社会に対応すべく電子新聞を発行する会社も増えている。

研修日程の半ばを過ぎた日に彼らと話をする機会があった。短い時間だったが、それぞれがマスコミを目指す明確な目的意識を持っていることに驚かされた。

「新聞は情報量が多く、ネットに比べて正確」記事を書くだけでなく、イベントの企画・立案など多彩な仕事の魅力「新聞は将来にわたって残っていく」三年次から就職活動を余儀なくされる後輩たちが見事に夢をかなえるよう声援を送りたい。

(富山市在住)

## 研究室から

## ドイツ言語文化

ヨーロッパ言語文化教授

宮内 伸子

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。ドイツ言語文化研究分野は、二〇〇五年にフランス言語文化およびロシア言語文化とともに、「ヨーロッパ言語文化コース」を構成することになり、ドイツ言語文化はその中の一つの教育研究分野となりました。

教員の人数はかなりの長いこと六人体制が続いていましたが、それがここ二年ほどの間に三名へと半減してしまいました。二年前の三月に北村純一先生と山本孝一先生が定年退職されたのに続き、今春には別本明夫先生も定年を迎えられました。大学の人件費削減のありをまともに受け、三名去ったにも拘わらず一人も後任を取らず、この四月より、黒田廉先生、阿部美規先生の二名のドイツ語学の教員とドイツ文学の宮内の三名で教室の運営を行っています。幸いにもこの他にネイティブの常勤教員がいるので助かっています。ザビーネ・ローベさん、クラウディア・シュミットホーファーさん、エーファ・カペラさんと若い女性の先生が続いた後、現在はヴォル



フガング・ツォウベク氏がその任を務めています。ここに掲げた写真は、本年三月末に開催した、別本先生退職記念祝賀会の際のものです(撮影・阿部先生)。別本先生が教養部から人文学部に移られた一九九三年頃からの卒業生に声をかけたところ、三千名もの皆さんが集まってくれました。卒業生の元気な姿を見ることが教員にとってこんなにも嬉しいものであるのか、想像を超えた喜びを味わいました。

現在の学生数は、四年生が五名、三年生が四名、二年生が八名の総勢十七名です。今も昔も変わらず、ドイツ語という新しい外国語に挑むチャレンジ精神と、語学学習に欠かせない忍耐力を兼ね備えた学生が集まっています。卒論指導をしていると、それまでに培った語学力を駆使して原書を読み解き、参考文献を読みつつ思考を重ねてオリジナル리티あふれる論文を作成していく様子に、知的に頼もしいものを感じます。今日の大学の置かれている状況を鑑みると、教員数の挽回は容易ではないと思われますが、今後ともドイツ語やドイツ文学を通して、学生の豊かな知的能力の醸成に寄与していきたいと考えております。

# 社会人学生として過ごした

## 貴重な二年間

三好 清超(大学院26回歴史文化)



飛騨市・江馬氏下館跡出土の墨書土師器

と共に、遺跡の見方と解釈における考古学的研究手法の大切さも学んできました。そして、改めて考古学を学びたいという想いが日増しに強くなっていき、進学を決意したのです。

進学先に、歴史・文化の両面で飛騨と結びつきが強い、富山大学大学院を選ぶことは当然の流れでしたが、社会人学生を応援してくれる体制も後押ししてくれました。大学院の講義は少人数演習を基本としています。

「考古学を学びたい」、富山大学大学院に社会人学生として飛び込んだ、平成二十四年春の想いです。

私は、岐阜県飛騨市教育委員会の学芸員として発掘調査を担当しています。業務を通じて、石棒を作っていた縄文時代のムラ、日本書紀に記載のある古代寺院、庭園を持つ室町時代の武家館など、飛騨市の重要な遺跡と関わってきました。

その経験の中で常に心掛けてきたことは、発掘調査時には正確に歴史情報を抽出するよう細心の注意を払うということです。

こと、遺物と向き合って正確に情報を実測図として作成すること等、一から考古学の研究手法を学ぶことができました。さらに、説明文の論証過程に無理がないか、また実測図や写真でデータの客観性を確保できているかについて毎回の演習で確認いただき、最終的に修士論文として完成させることができました。これは、ここでしか経験できないことで、非常に贅沢で貴

重な二年間となりました。

指導教官である次山淳先生、副指導教官である鈴木景二先生・高橋浩二先生には、社会人学生ということで時間割に配慮の上で修了までお導きいただき、大変感謝しております。今後はこの経験を活かし、発掘調査と報告書の精度を少しでも高めていけるよう努めてまいります。

(飛騨市在住)

## 中国を味わう

長瀬 知香

(61回日本語学)



「海外で現地の人に日本語を教える…。なんだか楽しそうだし、カッコいい!」

私が中国で日本語講師になることを決めたのは、そんな単純な考えからでした。

私は現在、中国黒竜江省にあ

る、国立佳木斯(ジャムス)大 学外国語学院にて、日本語講師として働いています。日本の大 学とは違い、学年ごとに二十人 程度ずつのクラスに分かれ、そ れぞれの教室で決められた授業 を受講するのが特徴です。日本 の中学や高校の制度とほぼ同じ であるといえるでしょう。

中学生になり、英語を勉強し 始めた頃から、私は語学を学ぶ ことが好きだと感じるようにな りました。大学への進学にあた っては、日本語学コースがある というので富山大学人文学部 を選びました。大学在学中には 中井精一先生のご教授のもと、 数え切れないほどの貴重な体験 をさせていただきました。さら に、大学三年の夏から半年間、 韓国大邱市にある国立慶北大学 校へ交換留学生として通いまし た。そこで日本語を学ぶ韓国人 と交流し、彼らの学習に対する 積極的な姿勢に刺激を受けたこ とを今でも覚えています。

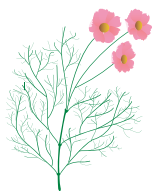
昨年三月、富山大学の卒業式 の二日後に、私は佳木斯に到着 しました。中国に来るのも初め てでしたし、中国語も「你好 (こんにちは)」と「謝謝(ありが とう)」しか知らない、という

状態でした。勿論不安もありま したが、それでも初めての環境 に胸を膨らませていました。母 は「誰にでもできる経験じゃな いから頑張ってね」と声をかけ てくれ、理解ある家族のおかげ で私は中国生活を満喫できるの だと思いました。

初めての授業の出来は、今に なって振り返れば今一つでした。 授業について相談した当時の日 本人の同僚からも、中国人の先 生方からも、同じアドバイスを 受けました。「長瀬先生が楽しん だうにしていれば、学生も楽しん でくれますよ」。そんな単純なも のだろうかと半信半疑でしたが、 私が楽しく進められた授業は、 確かに学生の反応もいいのです。 それからは、授業が楽しくなる ことを第一に心掛けています。

人懐っこく素直な学生達から は、毎日元気をもらっています。 懸命に学ぼうとする彼らに日本 語を教えつつ、私自身も日々勉 強し、広い中国を今後も存分に 味わいたいと思っています。

(中国黒竜江省在住)



## 旧制富山高専学校

## 同窓会所蔵資料の受領について

富山大学学長補佐(アーカイヴズ担当) 立川 健治



套、高下駄等)を展示し、好評を博しました。

大学展開催中の五月二十日には、人文学部同窓会、人文学部のご協力も得て、旧制富山高専同窓会の諸先輩を大学にお迎えし、展示を見ていただくとともに、資料の受領式を行い、あわせて懇親会を開きました。

旧制富山高専同窓会から受領した資料については、保存とともに、今後その活用をはかつていく予定にしております。

昨年、旧制富山高専学校同窓会は解散いたしました。人文学部同窓会を通して、同窓会が所蔵していた関連資料の取り扱いについて相談を受けました。

富山大学では、将来のアーカイヴズ設置に向けて準備を進めていますが、それらの関連資料を準備の一環として預かり、その活用につとめることが最善と判断し昨年十一月、旧制富山高専校及び同窓会に関する七十三品目の資料の譲渡を受けました。

今年三月二十五日～五月二十四日まで開催された第三回富山大学展に、その一部(制帽、外

## 第二回 人文の集い

日時▽平成二十五年十月五日(土)  
会場▽人文学部第二講義室

第二回人文の集いは、午前十時より、人文学部教授ヴォルフガング・ツォウベク先生の講演「日本の狂言とウィーン民衆演劇」と題する講演から始まりました。参加者は時代と地域を超えた庶民笑劇の類似性を興味深く拝聴しました。その後昼食懇親会を開き、世代を超えた懇談が和やかに続きました。

## 卒業祝賀会

平成二十六年三月二十一日、

ホテルグランテラス富山で、卒業祝賀会が開かれました。人文学部学位授与式に引き続き、同窓会主催で行われるもので、会場には多数の卒業生達や、先生方、同窓生が集いました。



大工原学部長の乾杯ご発声で会場は大いに盛り上がり、共に卒業の門出を祝いました。恩師や友人との語らい、盛装姿の記念撮影など賑やかに宴が続きました。名残は尽きませんでしたが、最後に米原同窓会会長の万歳三唱で終宴となりました。

平成二十五年年度

## 富山大学人文学部同窓会総会

日時▽平成二十五年十一月九日  
会場▽ボルファートとやま



平田純先生ご講演

業務報告、決算報告承認の後人事案件に移り、松平義磨会長が退任され、米原寛理事が新たに会長に就任されました。また中川禎子副会長に代わり田中史

子監事が副会長になりました。総会後、平田純名誉教授による記念講演「英訳の日本文学管見」をお聞きしました。

平成二十五年年度

## 第一回理事會

日時▽平成二十五年六月十九日

旧制富山高専学校同窓会より同窓会関係資料が大学に譲渡され、当会はその活用協力することとなったことが報告されました。新理事として巻口宗一郎氏(62回日本文学)、吉田文弥氏(62回英米)を総会に提案することが了承されました。

## 新刊案内

人文学部縁の方々の新刊を紹介します。

## 森鷗外『舞姫』を読む

武田文武／編 金子幸代(教授)／他執筆 勉誠出版 2013年4月刊  
ロシアの演劇 起源、歴史、ソ連崩壊後の展開、21世紀の新しい演劇の探求  
マイヤ・コバヒゼ／著 荒井雅子(大学院10回卒)／訳 生活ジャーナル 2013年5月刊

## 古代山国の交通と社会

鈴木靖民／他編 鈴木景二(教授)／他執筆 八木書店古書出版部 2013年6月刊

## 新時代アメリカ社会を知るための60章

赤尾千波(教授)／他編著 明石書店 2013年6月刊

## 西田美術館のロシア・イコン(調査報告書)

中澤敦夫(教授)／他著 西田美術館 2013年7月刊

## 円朝全集 第5巻 二村文人(教授)／他校注 岩波書店 2013年8月刊

自由研究 宗教・歴史・文化 曾我弘逸(16回哲学卒)／著刊 2013年8月刊  
注意をコントロールする脳

学阪直行／編 坪見博之(准教授)／他執筆 新曜社 2013年8月刊

ピア・サポートの社会学 ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く

伊藤智樹(准教授)／編著 見洋書房 2013年11月刊

## 小寺菊子作品集 1、2、3

金子幸代(教授)／編集・解説 桂書房 2014年2月刊

## 『楚辞』と楚文化の総合的研究

同編集委員会／編 大野圭介(准教授)／他執筆 汲古書院 2014年2月刊

## 杉谷4号墳 第1次発掘調査報告書

人文学部考古学研究室／編刊 2014年3月刊

## ふるさと文学を語るシンポジウム報告書 第5回

富山文学の会(人文学部内)編刊 2014年3月刊

## 陰謀論の正体! (幻冬舎新書)

田中聡(33回文構・専攻科13回卒)／著 幻冬舎 2014年5月刊

## 探検言語学 ことばの森に分け入る

呉人恵(教授)／他著 北海道大学出版会 2014年6月刊

野上文山 覚書 栗三直隆(8回史学卒)／著刊 2014年8月刊

## 平成26年度人文学部 総会へのお誘い

拝啓 今夏は例年になく高温と豪雨災害に悩まされた日々でしたが、皆様にはお変わりなく、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて本年度の総会を、下記の要領で開催いたしますので、多数の皆様のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。

敬白  
人文学部同窓会長 米原 寛

日時 平成26年11月1日(土) 午後1時30分  
場所 ボルファートとやま  
(富山市奥田新町81 TEL 076-431-1113)

講演 講師 人文学部教授 呉羽 長<sup>すずむ</sup>  
演題 『源氏物語』の終焉と紫式部

## 講演要旨

『源氏物語』は、光源氏亡き後、薫を中心に若き男女の関りをめぐり、世界が展開します。この宇治十帖最後の女君浮舟は、薫によって宇治河畔に据えられますが、匂宮の情熱的恋慕を受け甘美な情趣に浸ったことで悩みを大きくし、宇治川に身を投げようとします。しかし叶わず、横川僧都(よかわのそうず)の導きで小野に伴われ出家を遂げることになりました。その後彼女は自分を求め続ける薫との再会を拒み、その心閉ざす姿を描いて物語は中断します。

作者はどのような思いでこの浮舟に寄り添い、物語を進めてきたのか。『紫式部日記』に見える作者の内面を考えながら、作品が終焉に至る必然を辿り、作者にとっての『源氏物語』の意味を明らかにしてみたいと思います。

懇親会：午後4時 会 費：5,000円(当日受付でお納め下さい)

お知らせ

「人文の集い」「ホームカミングデー」同日開催

～富山大学の歴史に触れてみよう～

## 第三回人文の集い

講演「往時茫々」

「中文専攻」誕生秘話をめぐって」

講師：富山大学名誉教授

三寶 政美

期日：十月十八日(土)

午前10時～11時30分

会場：富山大学人文学部一階

第二講義室

中国語中国文学専攻課程が富山大学に発足したとき、当時の地方国立大学での嚆矢であったことはご存知でしょうか。その理由について、富山の政治家松村謙三をめぐる謎めいた秘話がありました。一九七二年の日中国交正常化の実現のために晩年の政治生命を賭した松村謙三の姿を明らかにしながら、中文発足時のお話を語っていただきます。

終了後、十一時五十分よりキャンパス内の「アザミ」にて昼食会を予定しています。講演は参加費無料、昼食会は会費二千円で、どちらか一方だけの参加も可能です。

## 第七回富山大学

ホームカミングデー

今年のホームカミングデーは

同日、五福キャンパスにて人文学部を中心に行われます。開会式の後、講演会が開かれます。

開会式期日：十月十八日(土)

午後一時～三十分

開会式会場：富山大学人文学部

三階六番教室

講演：「富山大学アーカイブス」富山大学のルーツを映像・写真・資料で確かめよう」

講師：富山大学人文学部教授

立川 健治

中央図書館で「富山大学ヒストリア展示コーナー」も予定されています。午後四時からは新装なった大学食堂で懇談会が催されます。懇談会参加費は無料です。

同封のチラシをご覧ください。「人文の集い」「ホームカミングデー」のどちらも同封八ガキでお申込みください。多くの方のご参加をお待ちしています。

## 人文学部教員異動

退職 (平成26年3月)

○別本 明夫(ドイツ言語)

着任 (平成26年4月)

○野澤 豊一(文化人類学) 准教授

大野 四郎(国文6)

平成15年5月20日

杉村 朱見(英文34)

平成24年(旧姓米田)

澤田 和夫(英文教員)

平成22年3月24日(旧姓後藤)

安藤 聡(哲学36)

平成24年4月15日

東狐恭仁子(英文4)

平成25年8月27日(旧姓山口)

朽木真寿美(国文26)

平成24年8月29日(旧姓五十嵐)

水島 桂子(文化人類学32)

平成24年9月4日(旧姓早崎)

丸谷 利夫(史学19)

平成24年3月

小林 之夫(英文3)

平成23年11月14日

宇尾野逸作(英文教員)

平成23年11月1日

## 年会費の報告

本年度の年会費納入状況をお知らせします。平成25年6月1日～26年5月31日迄、285名(終身会費9名、年会費276名)の方々から368,800円の年会費を納入していただきました。ご支援、ご協力を厚く御礼申し上げます。

## 編集委員

田中 史子 谷口 恵子  
成瀬裕美子 山藤 登  
畠山 節子